

エッセンス

「Taking the Lead : カナダ発 女性コーチの戦略と解決策」 の発行に寄せて

なでしこジャパンのW杯優勝、五輪3連覇の吉田沙保里選手——

スポーツ界での女性の活躍は、社会全体が「女性の時代」であることを一瞬にして印象づける。確かに、女性の社会進出はもはや当たり前となり、女性管理職の割合も少しずつ増えている。女性の積極的な登用が、経営不振の企業が立ち直る「鍵」とまで言われるようになった。スポーツの世界も、社会の動きと連動するように女性トップアスリートが顕在化するようになった。しかし、その一方で、トップレベルの女性の監督、コーチに目を向けてみると、活躍する女性アスリートの数に比例していないことがわかる。

女性の監督やコーチが少ないという現状は「女性は男性よりも指導力が低い」ことを意味するわけではない。女子サッカーのアメリカ代表チームは、北京・ロンドン五輪と2大会連続で女性監督のPia Sundhage氏が率い、金メダルに輝いている。ドイツでもSilvia Neid監督が北京五輪で銅メダル獲得に貢献し、女性監督として初めてFIFA最優秀監督賞の栄冠を手にしている。日本では女子マラソンの山下佐知子監督も2009年世界陸上競技選手権大会で尾崎好美選手を銀メダルに導いた。シンクロナイズドスイミングにおいて中国に初のメダルをもたらした井村雅代ヘッドコーチを見れば「女性監督は男性監督よりもモチベーションが低い」などとは言えまい。

実績も情熱も兼ね備えた女性の監督、コーチは日本にも、他の国にも存在する。にもかかわらず、その数が特に日本においてなかなか増えていかないのはなぜなのか——。

*Taking the Lead*は、そんなスポーツ界を目の当たりにしてきた女性たちによる問題提起の書である。指導テクニックに偏りがちだったこれまでのコーチング論とは異なり、スポーツ指導の現場で奮闘する女性たちの声に耳を傾け、指導環境改善を呼びかけるとともに、女性自身が取り組むべき具体策も盛り込まれている。カナダの事例とはいえ、日本でも共通した内容や適用できる取り

組みが散見され、監督やコーチを目指す女性たちが自分の道を切り開いていくための解説書としても活用できるだろう。

本書は、指導現場に関わる人たちが、気軽に手に取り、活用できるよう、全翻訳版のダイジェスト版として発行するに至った。読者が自分の興味・関心にもとづいて、どの章からでも読み進められるように構成も工夫してある。ぜひ一読いただきたい。

女性の監督、コーチの数を増やすことは、単なる「数」の問題だけを取り上げているのではないことを明記しておく。指導現場に女性の監督やコーチが日常的に存在することは、女性アスリートのキャリア形成という点からも重要なのだ。女性の監督、コーチが身近にすることで、アスリートは現役選手としてだけでなく、監督やコーチとしてもスポーツに関わり続けることができるという未来展望を描きやすくなる。また、監督やコーチとしてのキャリアが保障されていることで、女性のスポーツ参加の厚みが増していくことも期待できるだろう。

さらに育児や、仕事と家庭の両立に関しては、男性監督、男性コーチにも開かれていくべきテーマである。そうでなければ、いつまでたっても「育児・介護は女性の問題」に終始してしまう。本書がスポーツに関わるあらゆる人たちに共有されることを期待している。そして、日本の指導環境についての意見交換が促進される一助になることを願っている。

順天堂大学 マルチサポート事業
女性リーダーシップ開発プロジェクト
リーダー 山口 理恵子